

【書評】

Susumu Takenaga, ed., *Ricardo and the Japanese Economic Thought: Selection of Ricardo Studies in Japan during the Interwar Period*

London and New York: Routledge, 2016, 263 pp.

本書は、この数年にわたって日本の研究者も執筆参加してきた、ラウトレッジ出版のリカードウ研究書シリーズの一冊である。編者である竹永進は、このシリーズのうち“貨幣・金融論”を扱った別巻にも執筆しているが、本書においては、真実一男（1962：1965）や出雲雅志（2014）の仕事を踏まえつつ、日本のリカードウ研究の、英文による紹介を企図している（以下、書名等における旧字体は新字体に改めて記す）。

『リカードと日本の経済思想—戦間期日本におけるリカード研究選書』と題されているように、本書は、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての、代表的な日本のリカードウ研究を精選し英語訳したものである。取り上げられているのは、福田徳三・河上肇・小泉信三・堀経夫・森耕二郎・舞出長五郎であり、それぞれの著書あるいは論文が六つの章で抄訳されている。また「序章」には、編者による解題が置かれている（「解題」の日本語訳は、『経済論集〔大東文化大学〕』第102号、2014年に掲載されている）。

『選書』という性質上、この書評では、採録された著作そのものの内容的な検討や評価ではなく、もっぱら形式的な、以下の諸点についての吟味をおこなうことにする。すなわち、第一に、何故、戦間期か、第二に、何故、この六人のその著書か、第三に、その著書からの抜粋は適切か、第四に、訳語は適切か、である。以下、順次論評していくことにしよう。

まず、第1に、「戦間期」に絞ったことに

ついてである。この問題は、時期区分の仕方に関連してくる。いま仮に、日本におけるリカードウ研究の歴史を、①草創期（明治以降～1930年代）、②発展期（1930～1960年代）、③原典回帰期（1960～1990年代）、④学際的展開期（1990年代以降）のように区分するならば、例えば、内在的研究が着実に開花する第二次世界大戦前後の一変する政治環境を間に挟んだ時期(②)、スラッファによる『リカードウ全集』の刊行（および翻訳）が与えたインパクトによる原典への再回帰の時期(③)、あるいは、他の隣接分野との研究交流と国際発信に意識的に取り組みつつある直近の時期(④)、のそれぞれについて、「日本におけるリカードウ研究」の魅力ある紹介は可能であろう。本書は、「戦間期」と題されてはいるけれども、1930～40年代に簇生する、人口論・機械論・恐慌論・貿易論、等々のより専門的に特殊化した諸研究に先行する、①の、日本におけるリカードウ研究の文字通り草創期の紹介、として読むことができるだろう。

第2に、何故この六人のその著書か、ということについてである。別の可能性として、例えば草創期における辞典や翻訳書に付された解説文、あるいは津田誠一『正統学派経済学説研究』（1926）や波多野鼎『価値学説史』（1928）による経済諸学説の一章としてリカードウを扱った文章、これらを集成した編集も考えうるが、あまりにも寄せ集め的で散漫になることが予想される。編者は、6つの章によって「二つの異なる学問経路」を示すこと

ができた、と述べているが (13)、日本におけるリカード研究の特質をも剔出しよとする本書は、その編集意図の明確さにおいて評価されてよいだろう。ただ、6人のどの著書か、という点では異論が生じうる。すなわち、1920年代以前の著書ということであれば、小泉は『アダム・スミス、マルサス、リカード—正統派経済学研究』(1934)でなくて『リカード研究』(1929)、舞出は『経済学史概要 上巻』(1937)でなくて「リカード分配論概説」(『経済学論集 [東京大学]』1924)、そして特に、堀『理論経済学の成立—リカードの価値論と分配論』(1958)は『リカードの価値論及び其の批判史』(1929)であるべきではないのか、という異論である。ここには、各論者の理論を後のより完成された姿で伝えるべきか、歴史的証言としてそのまま載せるべきか、という問題がある。

第3に、選ばれた著書からの抜粋は適切か、ということについてである。福田の三つの論文(1908~1913)は、アンダーソンと比較した地代論論文(1906)も候補として考えうるが、まず妥当な選択であろう。また森『リカード価値論の研究』(1926)の全16章から選択された5つの章も、評者は納得できる。ただ、河上については、『経済学大綱』(1928)の「序」だけでなく第三章第二「リカード」の一部を採録すべきではなかったか。河上に割り振られているページ数はわずか4ページであり他章とのバランスを著しく欠いており、編者が指摘するように訂正されるべき議論が含まれているとしても(27)、そのこと自体を紹介する意義もある、と考えるからで

ある。歴史的資料を提供するにあたって「理論」的により厳格であろうとする編者の学問姿勢には、共感を禁じえぬのではあるが。

第4に、訳文についてである。例えば、中略指示の欠落や斜字強調・傍線の見落とし、等々が指摘されうる(171, 181, etc.)。また、堀の図・数値例は掲載すべきではなかったか(151)、舞出における「外国貿易」は'foreign commerce'でなくて'foreign trade'と訳出すべきではないか(248)、等々が詮索的に言われうるかもしれない。しかし、原著の引用文をリカードの原典から一つ一つ丹念に起こし、また、例えば、福田と小泉の引用文における強調符号の継承を見落とすことなく注記を添えるなど(64, 123)、随所に編者の細かい仕事の跡を窺うことができる。戦前期の日本語を今日の英語に転訳することに含まれた本質的な困難も考えると、編者の努力を多としたい。

編者は、「この著作の翻訳と紹介は、大戦間期の日本におけるリカード研究の主な成果を、その水準・特質・問題点とともに示すだろう」(13)、と述べている。「古典のテキストにもとづいた経済学史の研究スタイル」(24)、「理論をより広い歴史的なコンテキストに置いて吟味する」(55)という、この時期に確立された学問精神を蘇らせようとする本書に籠められた編者の意欲は、単に、他言語国への日本の研究の紹介・発信として一石を投じるだけにとどまらず、現在の日本のリカード研究者に対しても大きな刺激を与えようことだろう。

(佐藤滋正：尾道市立大学名誉教授)